

いる。本書から得られた洞察を有機的に発展させて、米国や日本の禁酒運動や類似団体との比較をはじめとして、多くのひきだしを持つ著者は、我々の期待に添えてくれるにちがいない。このささやかな要望をもって、拙い書評の結びとしたい。

青木 健著

『ゾロアスター教の興亡』

——サーサーン朝ペルシアからムガル帝国へ——

刀水書房 二〇〇七年一月一〇日刊

A5判 XX十三七七頁 八五〇〇円＋税

榊 和良

七千年の歴史を誇るイランの精神文化の遺産の一つは、古代イラン諸宗教の中から改革宗教として生まれたゾロアスター教である。ユダヤ・キリスト教を始めとする諸宗教や哲学思想にも大きな影響を与えた古代宗教であることはよく知られている。一方、シルクロードを介して祆教として正倉院や東大寺にもその跡を残し、インドのパールスイー商人の来日などを通しての交流を考えると、我々にとってもそれほど縁遠い存在ではない。しかるにその教祖の活躍年代にも未だ定説が得られず、さまざまな要素を取り入れて変貌したその宗教史の全体像を描き出すこともきわめて困難だといわれる宗教なのである。

本書は、ゾロアスター教の研究書ではあるが、通史的で網羅的な解説書ではない。ゾロアスター教思想史の中でも、ゾロアスター教の教義が神話的な天使論・悪魔論の集合体からより理論化・組織化された方向へと推移していく過程に注目して、「サーサーン王朝時代に理論的な展開を示したゾロアスター教思想」と「ムガル帝国時代にイスラーム神秘主義の影響下に形

書評と紹介

成されたゾロアスター教思想」という二つの局面を扱う研究書である。

著者の独創的な視点は、ゾロアスター教史における「第一の興隆」が伝統的な「神話的教義を脱皮して、より理論的な展開を示した」時期である。「サーサーン王朝時代の三大聖火思想の展開と神官団の組織化」にあり、イスラームの征服により頓挫したものの、イスラーム思想の中に「光と闇の二元論」の痕跡を「伏流水」として残し、「イラン・イスラーム神秘主義の形成に多大の影響を及ぼした」のだと捉える。そしてムガル帝国時代（一五二六—一八五八）、北インドの残存ゾロアスター教徒が「イラン・イスラーム神秘主義思想をゾロアスター教思想の中に導入」したことを、「ゾロアスター教思想の飛躍」と呼んで「第二の興隆」であると捉える。

これら二つの極の意義を「ゾロアスター教思想全体の流れ」の中で検証すべく、最新の研究を踏まえて先行研究を紹介する形でゾロアスター教思想史の概観を示す。さらにイラン国内に残されたサーサーン王朝時代のゾロアスター教遺跡にも目をむけ、「文献資料と遺跡との照応関係に注目すれば、サーサーン王朝時代のゾロアスター教思想をより明瞭に認識できるのではないか」と考え、「第一の興隆期」に関連する資料としてこれらを地図や写真によって紹介する。一方、「第二の興隆期」については、新たに蒐集したものを含むさまざまな文献資料に解題を加え、「その解説に関する一つの試論」として本論を展開することを試みる。

本書は二〇〇一年から二〇〇五年にかけて発表した八つの論

文と書き下ろしの章を含む二部から構成される。以下に各章の章題とその要点を紹介する。

第一部「サーサーン王朝時代のゾロアスター教思想」は、「概説その1 ザラスシュトラ・スピターマの到来から一〇世紀まで」として教祖の宣教から一〇世紀までのゾロアスター教思想史の概説で始まる。「原始ゾロアスター教教団の成立と古代イランの諸宗教」では、ゾロアスター教の教義の捉え方や聖典研究史、古層『アヴェスター』やパフラヴィー語文献に基づく教祖像、原始ゾロアスター教の故地についての諸学説の整理、もうひとつの古代イランの宗教としてのマゴスの宗教とその残滓を紹介する。「ハカーマニシュ（アケメネス）王朝時代の宗教」では、ダーラヤウウ（ダレイオス）一世以前と以降のアンシャン地域と呼ばれたペルシア地方の宗教文化事情を、古代ペルシア語碑文やペルセポリス出土のエラム語文書などをもとに描き、エラム文化やマゴス神官団の影響を示す。「ヘレニズム時代とアルシャク（アルサケス）王朝時代の宗教」では、ギリシア人の記録やメソポタミアと東地中海地域での諸宗教への影響から、この時代の宗教文化事情を原始ゾロアスター教とマゴスの神官団による宗教やズルヴァーン主義などの混在・融合した形であったと捉え、ペルシス地方では原始ゾロアスター教と王権の結びつきを見出す。「サーサーン王朝時代のゾロアスター教」では、この時代の特徴として、神官皇帝の登場、ペルシア州でのゾロアスター教の復興、メソポタミアへの進出とズルヴァーン主義やマニー教との本格的な接触、ペルシア的ゾロアスター教の国教化、アゼルバイジャンのシーズにある第二

の聖火であるアードウル・グシュナスプ聖火の重視を挙げ、『アヴェスター』の編纂を研究史と共に紹介し、最後にアラブ・イスラーム軍によるサーサーン王朝の崩壊を描く。最後の「サーサーン王朝崩壊から三〇〇年間のゾロアスター教」では、混乱の時代にペルシア州に復活したゾロアスター教神官団が、新しい指導者職を設け、パフラヴィー語文学運動を起こして『デーンカルド』、『ブンダヒシュン』などを生み出したものの、活動を支えた商人たちの経済力の衰退による財政的逼迫やキャラバン・ルート上の拝火神殿の消失により活動の終焉に至ったことを説く。この導入部としての包括的ゾロアスター教思想史につづいて、第1部の本論が開始される。

第1章「サーサーン王朝時代ゾロアスター教における聖地の概念」では、ゾロアスター教の崇拜の対象である「聖火」に関して、ゾロアスター教徒が実際に崇拜している場所を「聖地」と捉え、現代イランにおけるゾロアスター教の聖地と古代・中世の文献資料に描かれた聖地の姿とを対照させることで、サーサーン王朝時代の聖地が純粹な神官階級の想定する聖火と民間信仰的聖地に置かれた聖火の融合したものであったことを解明する。

第2章「サーサーン王朝時代ゾロアスター教の神官聖火 その1」は、サーサーン王朝時代ゾロアスター教の三大聖火のうち第一位であるアードウル・ファッローバイ聖火の機能と重要性を考察し、そのありかをイスラーム期地理書、パフラヴィー語文献や近世ペルシア語書簡などから追い求め、支配権を象徴する「皇帝聖火」としてのアルダフシール一世が叙任した聖

火に至り、国家宗教として組織化されたゾロアスター教の中枢として機能した聖火像を描き出す。

第3章「サーサーン王朝時代ゾロアスター教の神官聖火 その2」では、『ブンダヒシュン』の難解語の再検討により、サーサーン王朝崩壊後から一三世紀までのアードウル・ファッローバイ聖火のありかが、神官団の在所と避難場所に移っていたことを明らかにする。

第4章「九世紀ペルシア州のゾロアスター教神官団の教義改変システム」では、サーサーン王朝期以降のゾロアスター教神官団研究史を批判的に概観した後、神官の書簡集である『マヌシュチフルの書簡』を取り上げてその概要を説明してから、『書簡』の書き手と受け取り手の称号の分析により教義改変に与る神官団の組織やプロセスを解明する。

第1部の最後には、第1部全体に匹敵するページ数にわたり「第1部に関する写真資料集成」として、メディア王国時代、クル王朝およびハカーマニシュ王朝時代、アルシャク王朝時代、サーサーン王朝時代そして現代のゾロアスター教拝火神殿と聖地の写真資料が解説と共に示される。

第2部「ムガル帝国時代のゾロアスター教思想」の冒頭では、「概説その2 イラン・イスラームにおけるゾロアスター教の遺産」と題して、第2部を理解するための予備知識が読者に提示される。まず始めに、一〇世紀から一六世紀に至るまでの「生き残ったゾロアスター教徒コミュニティ」として、イラン高原に残ったゾロアスター教徒とパールスィーと呼ばれるインドの西海岸グジャラート州に渡ったゾロアスター教徒の姿

書評と紹介

が、パフラヴィー語の写本や近世ペルシア語文献、ヤズド近郊のゾロアスター教徒とグジャラートのゾロアスター教徒との近世ペルシア語での往復書簡などにより描かれる一方、イラン文化の基底に残ったゾロアスター教徒の姿は、叙事詩や神秘主義文学という「近世ペルシア文学の中のゾロアスター教」として示される。「イラン・イスラーム神秘主義思想とゾロアスター教」では、ゾロアスター教のイラン・イスラーム神秘主義思想への浸潤の姿を、イスマール派の時間論、シーア派の「フルカルヤー界」、グノーシス的ヴィジョンに現れる光の階層変化などの類似性、光と闇の象徴表現によりマーニ的世界観とネオプラトニスムの流出論を融合したスフラワルディーの東方神哲学などへの影響を認めるイスラーム学者アンリ・コルバンの説に沿って検討し、マゴスの宗教の遺風の残るメディア地域出身のスフィー、アイヌル・クダート・ハマダーニーの思想との関連を示唆する。

第2部の本論は、第5章「アーザル・カイヴァーンの軌跡」で始まる。インドに拠点を移して活動したシーラーズ系ゾロアスター教徒であるアーザル・カイヴァーンについて、弟子や孫弟子が残した『四庭園の都市』と『ダベスターネ・マザーヘブ』に基づいて、その生涯を、時代背景、出生地、成長環境としての当時のイランやインドの思想状況からたどり、先祖、家系、日常生活、親戚関係、交友関係、著作、弟子たち、行動範囲、その死、そして後継者たちについて極めて簡潔に解説する。さらにその思想的特徴として、ペルシア語や古代ペルシアの文化や宗教伝統への誇りに現れるペルシア民族主義、ゾロア

スター教的聖者観や修行論を含む神秘主義思想、そして諸宗教との融合傾向を挙げる。

第6章「新聖典『ダサーテイル』の創出」では、その構成を概観し、その形成に与えた影響を『クルアーン』の啓示観の規範性、イブン・アラビーの『叡智の台座』の構成、民族神話『シャーナーメ』に基づく預言者像、伝統的ゾロアスター教の祭式儀礼に見出し、思想的特徴を創世記、星辰の大周期と人類の発生、時間感覚と終末論、そして社会階層と王権の位置づけなどにあると理解する。

第7章「アーザル・カイヴァーン学派の聖典思想」では、通史的にゾロアスター教の聖典観の変遷を描こうと試み、『アヴェスター』のガーサーと註釈部分、マンストラと儀式部分、そして法律部分の役割を検討し、イスラーム教との接触期におけるその評価と役割の変化を見る。著者は、教祖の捉え方が讃歌を扱う神官から預言者に変化したことをゾロアスター教徒の「啓典の民」化と捉え、『アヴェスター』の権威の空洞化が一七世紀には頂点に達していたと結論づける。

第8章「アーザル・カイヴァーン学派の哲学思想」では、『ブンダヒシュン』によってゾロアスター教の神話的三元論を提示し、それがどのように変化していったのかを見る。三世紀から一〇世紀までの間にアリストテレス哲学や新プラトン主義の哲学が導入されたことから哲学的流出論が生まれ、それをゾロアスター教の伝統にある神話的天使論と融合させようとして哲学的ゾロアスター教が生まれ、この哲学的流出論を継承したのが「アーザル・カイヴァーン学派」であることが『ダサーテ

イール』において検証される。だが、そこにも禁欲主義と欲望の葛藤において象徴的に理解される伝統的神話的二元論の影が見出されることを指摘する。

第9章「アーザル・カイヴァーン学派の神秘主義思想」では、『カイ・ホスローの杯』に示されるように、その神秘主義思想が、サーサーン王朝期ゾロアスター教の神秘主義を変容させつつ継承しているだけではなく、イスラームの東方哲学、東方神智学、とりわけナジュムツディーン・クブラーの「靈魂の色彩体験」やムハンマド・ヌールバフシユの修行階梯論の影響をうけていると指摘する。またアーザル・カイヴァーン自身の転地とクブラウィー教団の活動拠点との関連や教団の組織化への影響も示唆する。しかし伝統的な善悪二元論を光と闇の二元論に変容させ、天界遍歴における超越者との謁見を修行の完成と同一視するなど巧みに融合させた独自の神秘主義思想であると捉える。

第10章「アーザル・カイヴァーン学派の救世主思想」では、サーサーン王朝崩壊後に作られたパフラヴィー語文献とパーザンド、近世ペルシア語リヴァーヤト、一七世紀のグジャラート系ゾロアスター教神官の一家の三代にわたる近世ペルシア語文書、そしてアーザル・カイヴァーン学派の近世ペルシア語文献『ダサーティール』、『カイ・ホスローの杯』、『ダベスターネ・マザーヘブ』を用いて、「近世ゾロアスター教の諸変容をもたらした原因」を説明しようと試みる。それは『アヴェスター』に見られるような純然たる終末論的救世主ではなく、一〇世紀の『ザンド・イー・ワフマン・ヤスン』に示されるようなイン

ドから到来する「世俗化」した政治的救世主を求める救世主論であり、インド・イスラームの二千年紀救世主運動などを背景として、グジャラートのゾロアスター教神官団の神官皇帝としてのアクバルの救世主化を生み出したのだと指摘する。そしてそれが王権のあるべき姿をアクバルに求め、アクバルの宗教思想に融合し、終末論を離れて個人的救済を求める「近世ゾロアスター教」思想へと導いていった原動力だったと論じる。

第2部の終わりには、「第2部に関する文献資料解題」と題して、「アーザル・カイヴァーン学派研究の基本文献」、「カーマ東洋研究所における「アーザル・カイヴァーン学派」文献の所蔵状況」が示され、「アーザル・カイヴァーン学派」の研究史」として、イラン学者、イスラーム学者、グジャラート系ゾロアスター教徒の見解などを紹介した後、「アーザル・カイヴァーン学派」研究に関連する先行研究が批判的に紹介され、「まとめ」で締め括られる。

本書のインド・イラン学への貢献は、第一に、「概説その1」や「第2部に関する文献資料解題」で示した最新のゾロアスター教研究やイラン・イスラーム思想研究文献の紹介にある。第二に、拝火神殿の聖火の座やその意味、『マヌシュチフルの書簡』の再検討からの解説修正などにおいて新解釈を示したことがある。第三に、文献資料と現地調査などを駆使して、「有機的なゾロアスター教思想史」を描き出し、「中世インドのイスラーム的ゾロアスター教」誕生の背景を探った独自性にある。インドのゾロアスター教徒といえればパールスィーにのみ注がれていた視線を、パトナーという北東インドの地で活躍したペル

書評と紹介

シア系ゾロアスター教徒たちに向けさせ、評価したことに意義がある。

評者として残念に思うことをいくつか挙げておきたい。第一に、極めて整然と細分化された章立てで結論を導く姿勢が先行して、論の重複が多いことである。主張を繰り返すよりも、論拠を丁寧を示すことに説得力があるのではあるまいか。第二に「文献資料と遺跡との照応関係」からゾロアスター教の思想を明瞭化するという方法が、独立して第1部に付属された「写真資料集成」と解説でどこまで成功したかという疑問である。全般的な専門書の紹介とともに、個々の遺跡・遺物をめぐる考古学的参照文献を提示して本文に差し入れてもよかつたのではないかと思われる。第三に、第2部は「蒐集した資料の解釈に関する一つの試論」として提示したためか、章・節によって精粗の差が大きいことである。資料として挙げられた原典のうち、『カイ・ホスローの杯』は内容が要約によつて示されているが、第5章を理解するにあたり『四庭園の都市』、第6章、第10章には『ダサーティール』や『ダベスタンネ・マザーヘブ』の内容要約や本文引用、第9章におけるヌールバフシユ教団の影響を示す文献的証左も欲しかった。苦勞して蒐集した資料であればなおさら、大要を取意して紹介するにとどまらず丁寧に原文を提示して訳出することを読者も期待しているのではあるまいか。最後に、アーザル・カイヴァーン学派のゾロアスター教思想史における位置づけに関して、研究者の所説を付属資料として示さずに、「成功と失敗」という著者の評価が研究史の中でどのように位置づけられるのかという形で論じてほし

かつた。

評者にとっては、アクバルの提唱した「神の宗教（ディーネ・エラーヒー）」との関連における歴史資料との照合問題や、まさに原文の提示とその訳出部分から救世主思想との関わりでのインドのプラーナ文献や『カーラチャクラ・タントラ』との関連問題が浮き彫りとなったが、今後の課題としたい。

「足利惇氏・伊藤義教の両碩学以来六十年振りの日本人研究者による本格的なゾロアスター教研究書」という宣伝も、あながち誇張ではない。日本のイラン学は、著者の大先輩である荒木茂教授によつて東京大学で始まり、足利惇氏が京都大学で梵語学と古代ペルシア語研究の成果を発揮して伊藤義教博士を指導して学統をつないだ。著者は、東京大学東洋文化研究所が寄贈を受けて設立した「荒木茂文庫」や「伊藤義教文庫」の目録編纂に携わり、現在も伊藤義教博士の遺稿から、『デーンカルド』の翻字・翻訳を公表し、パフラヴィー語単語カードから「ゾロアスター教書籍パフラヴィー語辞書」編纂に取り組んでおられる。時代を越えて先学の情熱を受け継いだ著者の地道な努力による成果が、組織の改変により放浪するインド・イラン学の学徒たちに資するところは大きい。本書は、先学に託された課題の解決とともに新たな分野を切り開く可能性を期待させ、それを担う高い能力を持った若手研究者の登場を示している。